

中学校の部

特選 自由図書部門

「今日を生きる」



池田町立池田中学校一年

久保田 丈尊

人は、命が終わった時、身体はこの世から無くなってしまいうけれど、その人の意志はどこへ行くのか。身体といっしょに無くなってしまふのか。

今は、少なくなったが、僕は幼い頃「死」を自分なりに想像して恐くて眠れなくなる事があった。普段、生活をしている時は忘れていたのに、ふとした時に思い出す。

僕の中では、ずっと、死は恐怖だった。死を想像しても、どんなものかわからないから恐いし、不安なのだと思う。いつか、その時がきたら僕はどうするのだろうか。どんなふうに死を迎えるのか。

幼いハリーは、突然の事故で短い人生を終える。自分の死を受け入れられずにいたハリーだが、死後の世界で出会った人に力を借りて、自分が死んだのだと少しずつ理解していく。彼は、事故の前に姉とケンカをしてひどい言葉を口にしてしまった。それが姉との最後だった。ハリーの心残りとなってしまふ。

僕にも姉と兄がいて、そんな状況はよくある。汚い言葉を使ってしまった時、本当は悪いと思っても謝れず、もやもやした気持ちのまま、その日が終わることもある。

ハリーのいる死後の世界には「再会の国」という場所があり、会いたい人にもう一度会える。ハリーは姉に謝りたいと強く願っている、自分がいた元の世界へ戻る。

しかし、この世で生きる家族や友達に自分の姿は見えない。声を届けることも出来ない。

僕は、もし、自分が死んで、身体が無くなって気持ちだけが生きていて、自分がいない家族をみるのは、とてもつらい。苦しい。さみしくてたまらない。

ハリーも僕と同じだった。家族を強く想う気持ちが彼をこの世に戻した。僕が最も感動し、心を打たれたのは、ハリーが家族となんとかして再会しようとする場面だ。必死で想いを伝えようとするが、家族にハリーは見えない。僕は、死とは、そういうことなんだと思った。どんなに願っても、ハリーは、この僕が今、生きている世界に関わることは出来ない。

もし、本当にハリーのように死後の世界から、この世に心残りがある人が戻ることができたら、少しだけ死ぬということが恐くなくなる。相手には気付いてもらえなくても、会いたい人に会える。やり残した事を、死んだ後に取り戻すことができるのだから。そう、それが本当だったらの話だ……。

物語を読みながら、僕は、曾祖父が亡くなった時のことを思い出していた。初めて身近で触れる死だった。

所々ではあるが曾祖父との思い出が今でも僕の心に残っているし、家族が集まれば、曾祖父の話をしながら祖母や母が泣いたり、笑ったりする。そこに曾祖父の姿はないけれど、亡くなっても数年たっても、それぞれ家族の中で生きている。曾祖父が生前、庭に植えたキンモクセイが、秋になるとかわいらしい花を咲かせ、甘い香りがする。

そして、僕は、また曾祖父を思い出して、たまたまなく会いたくなる。

ハリーの家族もきつと同じだと思う。残された家族はつらくても生きていかなければならない。世の中は、そんな人たちであふれていて、日常が動いていく。

この世から去った人も、残された人も、後悔なく生きるなんてとても難しい。

僕はきつと、死後の世界がどんなものなのか、そればかり気にしていたけれど、ハリーが僕に教えてくれたのは、死後の世界のことではなく、今を生きる事の素晴らしさだった。

毎日、変わらない日常を過ごしていると、その一瞬一瞬がとても貴重だということを忘れがちで、永遠に続くものだと思ってしまう。

きつと、この先の僕の人生は、本当にたくさん嫌なことがあつて、逃げ出したくなるくらい苦しいこともあるだろう。

しかし、生きていなければ、今、当たり前だと思っている生活も、家族の愛情も、人の優しさも、風も香りも感じることはできない。

“死”は悲しいことだけど、僕には、亡くなった曾祖父が心の中で生きているし、生きていてほしいと思う人がたくさんいる。

それでも、死はいつか必ず訪れる。

僕たち人間は、そんな「生」と「死」をくり返している。だけど「死」は全てが無くなってしまうということではない。その人が、一生懸命に生きた証は、次の「生」に確実につながっていく。そうして、この世界は続いていくのだ。

だからこそ、今を生きている事に感謝し、大切な人を大切に想い、たった一度の人生だからこそ、もっと深く考え、尊い時間を、しっかりと、精一杯、生きたい。

アレックス・シアラー 作・金原 瑞人 訳

『青空のむこう』

求龍堂

#### 【講評】

日常とはかけ離れた「死」について考える中で、死は終わりではなく生きた証であると捉え直すとともに、今日という日を生きる素晴らしさに気付くまでを、繊細な表現で書かれていた点が素晴らしいです。